

島津荘に関する一考察 —成立期を中心に—

日 隈 正 守*

(2014年10月28日受理)

A study on Shimadzu zhuang — the center over established over —

HINOKUMA Masamori

要約

本論文では、日向・大隅・薩摩三箇国に亘る島津荘域の中で、大隅国内において国衙・国一宮(大隅国正八幡宮)と島津荘との間に対立関係があることを具体的な事例を通して指摘した。国衙・国一宮と島津荘との間に対立関係が生じた理由を島津荘立荘時に遡って考察し、島津荘立荘者平季基の大隅国府焼き討ち事件とその結果が国衙・国一宮と島津荘との対立の原因であることを解明した。

キーワード：島津荘 平季基 大隅国衙 大隅国府焼き討ち事件 大隅国一宮(大隅国正八幡宮)

はじめに

島津荘は、藤原摂関家領荘園である。鎌倉初期における荘域は、日向・大隅・薩摩三箇国に亘り八千町以上に及ぶ巨大荘園である⁽¹⁾。

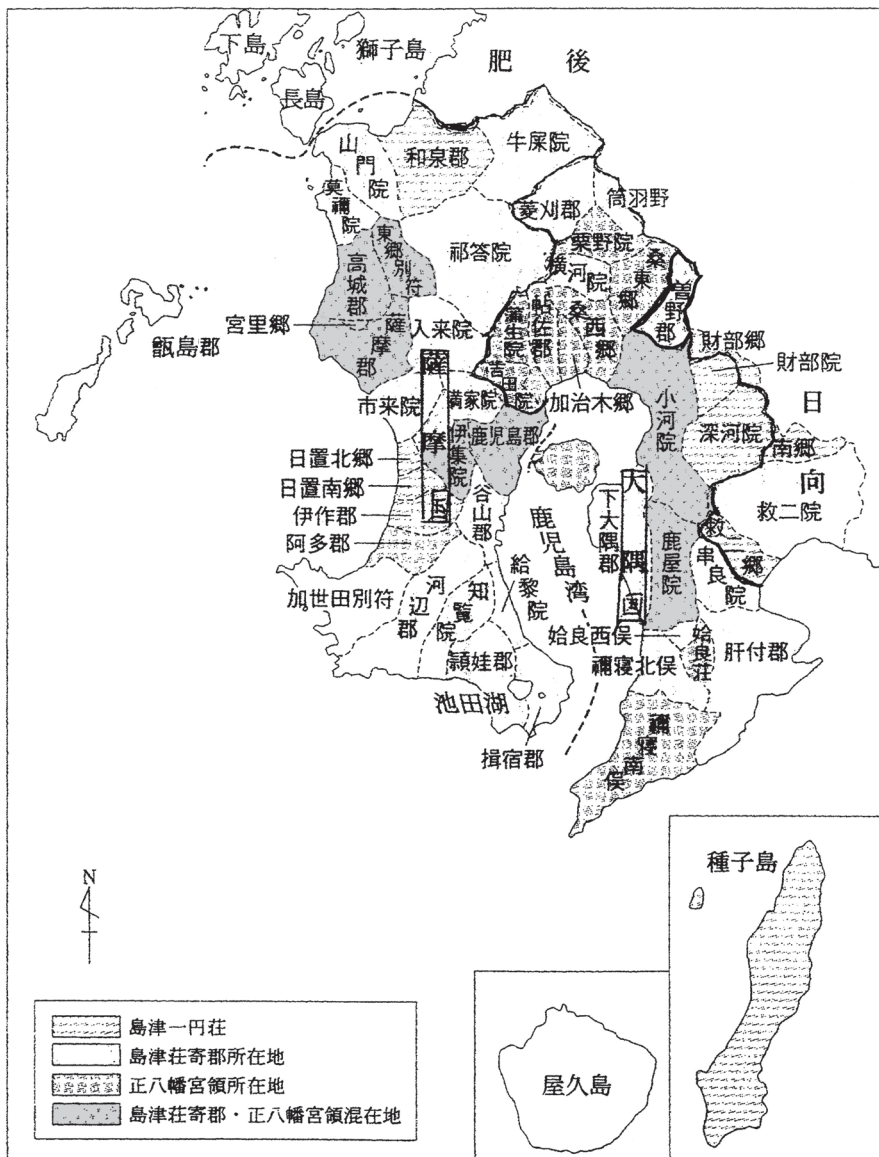
日向・大隅・薩摩各国内における島津荘と各国国衙との関係は各々異なっている。薩摩国のように国衙の在庁官人でありながら島津荘域の弁済使職を兼任している場合⁽²⁾もあれば、後述の大隅国の事例のように国衙と島津荘側とが対立していたと考えられる場合もある。大隅国内においては、国司・国一宮と島津荘とは特に関係は見られないし、後述のように島津荘半不輸地域には国司支配はあまり及んでいないと考えられる。

本稿では、大隅国内における国司・国一宮と島津荘との対立関係が生じた理由を明らかにしていく。

* 鹿児島大学教育学部 教授

一、大隅国内における国衙側と島津荘側との対立

本章では、大隅国内における国衙側と島津荘側との対立関係について考察したい。まず大隅国内において、大隅国衙領や大隅国一宮である大隅国正八幡宮領が比較的多く存在する地域と島津荘域部分とを比較して考察する。大隅国建久図田帳⁽³⁾の中から大隅国衙領や大隅国一宮領が比較的多い地域部分を史料①として掲げる。また平安後期から鎌倉期にいたる大隅国の行政区画を示した図を図表①として掲げる。



中世郷荘図

原口泉他『(県史46)鹿児島県の歴史』(山川出版社, 平成12年), 87頁を基に作成。

史料①

曾野郡二百廿九丁四段大，
 正宮領五十六丁一段 本家八幡 地頭掃部頭，
 御供田十四丁七段，
 寺田十五丁七段，
 国方所当弁田，
 万徳五丁二段丁別十疋，
 恒見廿丁五段丁別十九疋三丈，
 国方，
 公田八十一丁，
 重枝廿丁 郡司藤原篤守所知，
 重富三十三丁 税所藤原篤用所知，
 件兩名依令私奉寄於正宮，耕作御佃三丁也，
 用松十五丁 藤原篤頼所知，
 弟子丸五丁 田所建部宗房所知，
 重武三丁 税所藤原篤用所知，
 元行五丁 権大掾建部近信所知，
 寺田九丁六段半仏性灯油析，
 経講浮免田五十三丁六段大 聖朝府国御祈禱祈，於正宮御宝前，
講衆各募，
 府社五丁七段 大府御沙汰，
 嶋津御庄永利廿三丁三段三丈 殿下御領 地頭(右脱力)衛門兵衛尉，

史料①に記載されているのは、大隅国建久図田帳曾野郡の部分である。曾野郡は、図表①によると大隅国内の中で東北部分に位置している。曾野郡は、平安中期以降大隅国衙が置かれていたと考えられる桑東郷⁽⁴⁾に隣接し、大隅国司と関係が深い大隅国一宮である大隅国正八幡宮が鎮座している桑西郷⁽⁵⁾の比較的近い所に位置している。

史料①をみると大隅国正八幡宮領が記載されている。まず大隅国正八幡宮一円領である御供田と寺田の面積が記載され、次に大隅国衙に所当を納め、雑公事を大隅国正八幡宮に納める「国方所当弁田」である大隅国正八幡宮半不輸領万徳と恒見の面積や大隅国衙に納める税の量が記されている⁽⁶⁾。

その後大隅国衙領である「国方」の公田を構成する重枝・重富・用松等の別名の面積や名主の名前が記されている⁽⁷⁾。大隅国衙の支配下にある寺田や経講浮免田，大宰府の支配下にある府社，島津荘域である曾野郡内永利地域の面積や地頭名等が記載されている⁽⁸⁾。

次に大隅国建久図田帳の中の島津荘域に関する記載部分を史料②として掲げる。

史料②

島津庄 殿下御領 地頭(右脱力)衛門兵衛尉、
 新立庄七百五十丁、
 深河院百五十余丁、
 財部院百余丁 謀反人故有道・有平子孫干今知行之、
 多禰嶋五百余丁
 件三箇所保延年中以後新庄、不随国務也、
 寄郡七百十五丁八段三丈、
 但付去仁平三年御庄方檢注帳注進之、御庄官等檢田入部時、満作年者貴(号力)居沽
 田付之、弁済所当物、不作年者雖遂檢田、不幾田数、国衙訴也、
 横河院三十九丁五段二丈、
 菱刈郡百三十八丁一段、
 郡本
 賜大將殿御下文、三郎房相印知行之、
 入山村宮崎宮浮免田、
 賜同御下文、千葉兵衛封(尉力)沙汰之、
 串良院九十丁三段二丈、
 鹿屋院八十五丁九段、
 肝付郡百三十丁二段三丈、
 禰寝北俣四十丁五段四丈、
 下大隅郡九十五丁九段、
 始良西俣廿四丁六段二丈、
 小河院内百引村十三丁四丈近郷小河院内有之、
 同永利十二丁六段四丈同近郷内有之、
 曾野郡永利廿三丁三段三丈、
 筒羽野四十八丁五段一丈、
 件村者宮崎浮免田以四十余丁押募十五丁、残不随国務、忝弁済使私用之、

史料②には、鎌倉初期の時点における大隅国内の島津荘域が記されている。島津荘域については、保延年中(一一三五年～一一四一年)⁽⁹⁾以後に島津荘の一円領化された深河院・財部院・多禰嶋の面積と建久八年(一一九七)時点における領有状態が記されている。

その後半不輸領である「寄郡」部分が記されているが、菱刈郡のみは郡の中心地である郡本と宮崎宮浮免田が設定されている入山村については大將殿(源頼朝)から領有を認められた人物の名が記載されている。しかしそれ以外の地域については、田積が記載されているだけで、領有者名は

ほとんど記載されていない。前述史料①に記載されている大隅国曾野郡内島津荘域である永利については史料②にも記載され、史料①には(右)衛門兵衛尉(島津忠久)が地頭であることが記載されている。

大隅国建久図田帳内島津荘域部分(史料②)の記載は部分的に領主名が記載されている箇所はあるが、大隅国内において大隅国衙領や大隅国一宮大隅国正八幡宮領が比較的多く存在する地域(史料①)と比較すると、記載が簡略である。大隅国衙領や大隅国一宮領が比較的多く存在する地域は領主名が多く記載されているし、大隅国衙と大隅国一宮半不輸地については大隅国衙に納める税の量も記載されている。

しかし島津荘域については、面積が記されているのみである。建久八年(一一九七)に作成された大隅国建久図田帳の中の島津荘域部分は、仁平三年(一一五三年)に島津荘側が作成した検注帳を付けて報告されている⁽¹⁰⁾。図田帳作成時に、大隅国衙は島津荘域に対する掌握が弱く、その結果記載内容が簡略になったと考えられる。

大隅国内において大隅国衙領や大隅国正八幡宮領が比較的多く存在する地域と比較して島津荘域部分の記載が簡略になったのは、大隅国衙は島津荘域に対する支配権があまり及んでいないことによると考えられている。本来島津荘寄郡は半不輸地であり、大隅国衙の支配が及ぶはずであった。しかし大隅国の場合島津荘寄郡では、検田は島津荘荘官により行われ、所当物は優先的に荘園領主に納められていた。故に島津荘域には、大隅国衙の支配はあまり強くは及んでいないことが確認されている⁽¹¹⁾。

大隅国内における大隅国衙や大隅国正八幡宮と島津荘との関係を示す史料がある。この史料を史料③として掲げる⁽¹²⁾。

史料③

島津御庄官等謹言上、

欲且依代々政所御下知并庄号以後二百六十余歳不勤例、且者任院宣関東御教書旨、被經御奏聞、被下綸旨、令言上関東、被究淵底、永被停止神宮等新儀濫訴、大隅国正八幡宮御造営当本庄不動子細事、

副進(中略)

右謹考故実、正八幡宮御垂跡者、和銅年中正殿已下社屋不残一字被支配三州図田^{日向、大隅、間、薩摩、}既五百余歳、(中略) 島津本庄者、万寿年中以無主荒野之地令開発、庄号令寄進宇治関白家以降、長元年中奉崇伊勢太神宮^{依神告号(神柱カ)神社}、宇佐八幡已下五社為鎮守、令建立七堂伽藍、称其題額於常樂寺、此外諸寺諸山御願寺、其数惟多、(中略) 右正応元年之言上狀歟、

史料③は、鎌倉後期の正応元年(一二八八年)頃に島津荘官達が提出した訴状写である。大隅国一宮大隅国正八幡宮修造役が島津荘立荘地である本荘域⁽¹³⁾に賦課されたことに対して、島津荘

立荘時以降島津本荘域は勤仕した前例がないことを島津荘官達は主張している。

大隅国一宮である大隅国正八幡宮修造役は、大隅国正八幡宮が鎮座している大隅国及び薩摩国・日向国三箇国で負担することが朝廷で定められた。これ以降大隅国正八幡宮修造役は大隅・薩摩・日向三箇国内における一国平均役で賦課されていたと考えられる⁽¹⁴⁾。

大隅国正八幡宮修造役が大隅・薩摩・日向三箇国に賦課された理由は、大隅・薩摩国が日向国から分立したことによると考えられる⁽¹⁵⁾。

大隅国正八幡宮修造役の大隅・薩摩・日向三箇国に対する勤仕状態については、前述のように日向国の場合島津本荘が勤仕を拒否している。薩摩国の場合、鎌倉前期正治二年(一二〇〇年)に大隅国正八幡宮修造関係役が、薩摩国衙と関係の深い新田宮⁽¹⁶⁾や宇佐弥勒寺領である日置荘・益山荘、島津荘寄郡⁽¹⁷⁾である谷山郡・牛屎院・東郷別符等⁽¹⁸⁾に賦課されている⁽¹⁹⁾。また建仁二年(一二〇二年)に川辺新宮、新田宮、開聞社、郡本社、薩摩国衙一円領である薩摩郡是枝名及び加世田別符、宇佐弥勒寺領である益山荘・日置荘、島津荘寄郡である莫禰院、牛屎院、高城郡、給黎郡、薩摩郡時吉名、薩摩郡吉永名、島津荘一円領日置北郷⁽²⁰⁾に割り当てられている⁽²¹⁾。薩摩国の場合大隅国正八幡宮修造役や修造関係役が島津荘寄郡や島津荘一円領に割り当てられている。大隅国正八幡宮修造役の薩摩国内の賦課状態に関する当該期の史料は管見の限りで以上であるが、限られた史料から大隅国正八幡宮修造役は薩摩国内に一国平均役で割り当てられていたと考えられる。特に相論が生じていないことから恐らく薩摩国は大隅国正八幡宮修造役を勤仕していたと考えられる。

大隅国正八幡宮修造役が大隅国内に割り当てられていることを示す当該期の史料は残存していない。大隅国正八幡宮修造役は、大隅国衙が国内全体に割り当てていたと考えられる。大隅国衙と大隅国正八幡宮との緊密な関係⁽²²⁾を踏まえると、大隅国衙は大隅国内に大隅国正八幡宮修造役を賦課していたと思われる。大隅国内においては、大隅国衙領や大隅国正八幡宮領は、大隅国正八幡宮修造役を勤仕していたと考えられる。しかし前述の通り本来大隅国衙の支配が及ぶ島津荘寄郡域は島津荘側の支配下にあり、国衙の支配はあまり及んでいない。このことを踏まえると、大隅国の場合島津荘域が大隅国正八幡宮修造役を勤仕していた可能性は小さいと考えられる。

前述の通り大隅国正八幡宮修造役は、大隅・薩摩・日向三箇国に賦課されていた。大隅国正八幡宮は大隅国一宮であり、大隅国に鎮座していた。日向国の場合島津本荘は大隅国正八幡宮修造役勤仕を拒否していたことは確認されるが、それ以外の地域が大隅国正八幡宮修造役を勤仕していたか否かは定かではない。しかし薩摩国の場合は、大隅国正八幡宮修造役を勤仕していたと考えられる。大隅国正八幡宮修造役について、日向国の場合は詳らかではないが、少なくとも薩摩国の場合は島津荘一円領・寄郡域も含めて大隅国正八幡宮修造役を勤仕している。大隅国の場合、大隅国正八幡宮は大隅国一宮であるにも関わらず、大隅国内の島津荘域は大隅国正八幡宮修造役を勤仕していなかった可能性が強い。大隅国内において、大隅国衙及び大隅国正八幡宮と島津荘との間には大きな亀裂があると考えられる。

本章では、大隅国内における大隅国衙・大隅国正八幡宮側と島津荘との関係について考察した。その結果大隅国衙・大隅国正八幡宮と島津荘との間には対立関係が存在することを解明した。大隅国衙と大隅国正八幡宮とは緊密な関係を有している。故に次章では、大隅国内において、大隅国衙と島津荘との間に対立関係が生じた理由を島津荘立荘時に遡り考察していく。

二、島津荘の成立

大隅国内における大隅国衙・大隅国一宮大隅国正八幡宮と島津荘との間の亀裂が形成された理由を解明するために、島津荘立荘過程について考察していく。

島津荘立荘の経緯を示す史料は、前掲史料③である。史料③によると、島津荘の起源は万寿年中(一〇二四年～一〇二八年)「無主荒野之地」が「開発」され宇治関白家(藤原頼通)に寄進されたことである。島津荘が立荘された地域は日向国諸県郡島津の地であると考えられているが⁽²³⁾、島津の地が本当に「無主荒野之地」であり「開発」される必要があったのか否かは現時点では解決していない課題である⁽²⁴⁾。

島津荘立荘者については建暦三年(一二一三)四月 日付僧智恵申状案⁽²⁵⁾に「御庄(島津荘)建立主平大監季基朝臣之御子息平五大夫兼輔朝臣」という記載があり、島津荘立荘者は平季基であることが確認されている⁽²⁶⁾。

平季基は、平貞盛の弟繁盛の子惟幹の子為賢の子孫であることが推測されている⁽²⁷⁾。大監は大宰大監のことで、平季基は万寿三年(1026)三月廿三日付大宰府解⁽²⁸⁾から『日本紀略』長元三年(一〇三〇年)正月二十三日条⁽²⁹⁾に至る期間大宰大監に在任していることが確認される。故に当該期平季基は、大宰府府官(以後府官と略記する)である⁽³⁰⁾。

一一世紀前期大宰府は、管内諸国に対する支配権を強化した。また大宰府長官は、府官を用いて、土地を集積した。管内諸国の受領達も任国内支配を強化したので、大宰府長官と管内諸国の受領達や寺社等との対立が激化した⁽³¹⁾。当該期大隅守菅野重忠も大宰府府官と対立し、寛弘四年(一〇〇七年)大宰府において大宰府府官大藏満高により射殺されている。この事件も大隅守と大宰府との深刻な対立を背景として起きたと考えられる⁽³²⁾。

当該期大宰府官人による「開発」は、豊後国日田郡、筑前国御笠東郷、肥前国小城郡等で行われていた。大宰大監平季基による島津荘立荘は、大宰府官人による「開発」活動の一つであり⁽³³⁾、大宰府による九州南部掌握の動きを示すものである⁽³⁴⁾。

同時期大隅国・薩摩国の国司や有力者達から右大臣藤原実資へ南島産の進物が贈られていることが指摘されている⁽³⁵⁾。私は、大隅国・薩摩国と南島とは直接交易していたと考えていた⁽³⁶⁾。しかし大隅国・薩摩国と南島との交易には、大宰府が関与していたことを指摘された⁽³⁷⁾。私は、大隅国・薩摩国と南島との交易は大宰府認可の下で行われていたと考えを修正したい。大隅国・薩摩国には、南島からの交易品が多く入手されていたと考えられる⁽³⁸⁾。大宰府が九州南部に関心を有していたのは、南島との交易利潤獲得を意図していたと考えられる⁽³⁹⁾。

平季基は大隅守と対立し、大隅国府を焼き討ちしている。平季基の大隅国府焼き討ち事件は永山修一氏により学界に報告され⁽⁴⁰⁾、その後分析されている⁽⁴¹⁾。まず永山氏により報告された史料を史料④として掲げる⁽⁴²⁾。

史料④

太政官符大宰府、

『賜官符於大宰召大監平季基事大隅国庁焼亡云々』、

応早附使者召進大監從五位下平朝臣季基并男散位從五位下兼光及兼助等事、

使右衛門案主笠孝良 從二人 火長一人

右、右大臣宣、奉勅、大隅国言上件季基等焼亡国庁・守館・官舎・民烟并散位藤原良孝住宅、及掠取財物、殺害雑人之由、仍令勘糺、宜仰彼府下知管内早附使者令召進其身者、府宜承知、依宣行之、使者往還之間依例給食・馬、路次之國亦宜准此、符到奉行、

右大弁源朝臣

左大史小槻宿祢(貞行)

長元二年八月七日

史料④によると、太政官は大宰府に対して、大隅国府を焼亡させた罪により大宰大監平季基の召喚を命じている。長元二年(一〇二九年)八月七日以前大宰大監平季基は、子息兼光・兼助とともに大隅国庁や大隅守の館、大隅国衙関係の官舎や人々の家々、散位藤原良孝の住宅等を焼き討ちして財物を略奪し、大隅国衙に仕える下級役人達を殺害した。大隅国司側はそのことを太政官に報告した。その結果太政官から大宰府に、大隅国の訴えを取調べ、使者を派遣して平季基とその子兼光・兼助達を捕えさせ都に出頭させ、使者の必要経費については通過国で負担させるようにとの命令を出し、その任に右衛門府案主笠孝良をあてることにしたという事実が分かる⁽⁴³⁾。

平季基達は、大隅国司の長官である大隅守が政務を執る場である大隅国庁、大隅守の館、大隅国衙関係の官舎を焼き討ちしている。季基達が焼き討ちにした建物は、大隅国司が大隅国の政務を執る上で根幹となる建物である。季基達が前記の建物を焼き討ちにした理由は、大隅守の大隅国支配を妨害することを意図していたと考えられる。

平季基・兼光・兼助達に住宅を焼き討ちにされた散位藤原良孝は、大隅国衙関係者である可能性や焼き討ち事件の約二十年後も大隅国内に居住していることが指摘されている。大隅国衙の在庁官人藤原氏との関係も推定され、中央政界との繋がりがあるとも考えられている⁽⁴⁴⁾。

平季基・兼光・兼助の大隅国衙焼き討ち事件は、大隅守の大隅国支配に壊滅的打撃を与えた点、大隅国内に焼き討ち事件後も居住し続けた有力者藤原良孝の住宅も焼き討ちした行為を通じて大隅国衙との間に継続的な敵対関係を生じさせたと考えられる。

平季基達の大隅国府焼き討ち事件当時の大隅守は、藤原実資の家人である船守重であった。船守重は、大海国府を焼き討ちにした平季基達を大宰府に訴えた。平季基の上司である大宰大貳藤

原惟憲は、季基から絹三千疋余りを得る代わりに大隅国府焼き討ち事件を朝廷に報告するための大宰府解には、平季基とその子兼助の名を削除し、季基の子兼光の名のみを載せた。

前述のように大隅守船守重は、大隅国府焼き討ち事件の犯人として平季基・兼光・兼助を大宰府に報告していた。しかし朝廷への大宰府の報告書からは、平季基とその子兼助の名は除かれ、兼光の名のみが載せられた。船守重は、大宰府に大隅国府焼き討ち事件の犯人として平季基・兼助を報告することを要求し、大宰府も船守重の要求を入れて兼光達を逮捕するために府官を派遣した。しかし大宰府により兼光達が逮捕される以前に、船守重は大隅守の任期が終了していた。この結果船守重は、大宰府長官に訴訟することが不可能になった。故に船守重は、直接朝廷に訴訟した。

船守重の主人である右大臣藤原実資は、関白藤原頼通に大隅国府焼き討ち事件の真相を説明した上で、任期終了後前大隅守船守重が大宰府ではなく直接朝廷に大隅国府焼き討ち事件を訴訟したことは越訴ではないこと、平季基から絹三千疋余りを得る代わりに朝廷への報告書から平季基の名を除外したり、朝廷に直接大隅国府焼き討ち事件を訴訟した前大隅守船守重の行為を越訴であると主張した前大宰大貳藤原惟憲の言動は平季基を免責させるための謀略であることを伝えた。関白藤原頼通は、藤原惟憲が作成した大宰府解を基に官符を作成し、かつ実資の言を受けて平季基の名を載せることを決定した。この結果太政官符は間もなく大宰府に送られ、長元三年(一〇三〇年)正月平季基は京都に召喚されて取り調べを受けることになった⁽⁴⁵⁾。

平季基が大宰大貳藤原惟憲に絹を贈った時期は、藤原惟憲が大宰府に赴任していた時期であると考えられる。大宰大貳藤原惟憲は、長元二年(一〇二九年)五月四日京都に召還され⁽⁴⁶⁾、同年七月十三日に入京した⁽⁴⁷⁾。平季基が藤原惟憲に絹を贈った時期は、長元二年六月頃ではないかと考えられる。また大隅守船守重が任期終了したのは長元二年七月頃ではないかと考えられる。以上のことから平季基の大隅国府焼き討ち事件が起きたのは、長元二年六月頃ではないかと考えられる。

平季基が大隅国府を焼き討ちした理由については、永山修一氏が島津荘域拡大を巡る紛争であると推測されている⁽⁴⁸⁾。私は、平季基が日向国諸県郡島津の外湊である志布志湊⁽⁴⁹⁾を掌握するために、志布志湾一帯を島津荘域化することを意図し、志布志湾西南部である大隅国始羅郡串占郷域や同国肝属郡域を島津荘域化することを契機とする大隅守との対立であると考えている⁽⁵⁰⁾。大隅守としては、重要な水上交通路である串占郷域や肝属郡域を島津荘域に取りこまれることを到底承服できなかったと思う。

前述のように平季基は、万寿三年(一〇二六年)～長元三年(一〇三〇年)の期間大宰大監に在任している。長元三年大隅国府焼き討ち事件の取り調べのために京都に出頭を命じられた際、平季基は大宰大監に在任していた。しかしその後平季基が大宰大監に在任していることを示す史料は、残っていない。恐らく平季基は、長元三年正月以降京都で取り調べを受け始めた後、大宰大監を解任されたと考えられる。

平季基は、長元三年正月以降大隅国府焼き討ち事件の取り調べを受けたと考えられる。取り調べの際、季基が絹を贈った前大宰大貳藤原惟憲が仕えていた関白藤原頼通は、季基の罪科を軽減する方向で動いたと想定される。これに対して季基に大隅国府を焼き討ちされた前大隅守船守重の主人である右大臣藤原実資は、季基を処罰する方向で動いたと考えられる⁽⁵¹⁾。

平季基の取り調べが開始された時期、東国においては平忠常が反乱を起こしていた。長元三年正月の時点で平忠常の乱が鎮圧される兆候は未だ無かった⁽⁵²⁾。朝廷の中では、東西両方において戦乱状態が生ずることを避ける動きがあったと考えられる。この結果、季基の審理は長期化したと推測される。こうした状態の中で、長元三年九月新に甲斐守源頼信が追討使に任命され、平忠常の乱も終息に向かい始めた⁽⁵³⁾。平忠常の反乱鎮圧後平季基に対する審理が厳格化することを季基は恐れて、大隅国府焼き討ち事件の審理を早く終わらせる必要性を感じた。長元四年(一〇三一)平季基は、審理を終わらせるために、自分に対する処罰を求める右大臣藤原実資へ、唐錦・唐綾・絹等を贈った⁽⁵⁴⁾。この結果藤原実資は、平季基の処罰要求を抑えたと想定される。こうして平季基は、大宰大監を辞職しただけで許されたと考えられる。

大宰大監を辞任した平季基は、大隅国府焼き討ち事件の審理の中で、元上司藤原惟憲の主人である関白藤原頼通に、自らが「開発」した島津の地を寄進したと考えられる。季基は、当初島津の地を大宰府領にすることを考えていたと想定される。しかし大隅守船守重との対立が激化し、その結果両者の対立が大隅国府焼き討ち事件に迄行きついたことにより、季基は自らの身と「開発」地を守るために、当該期中央政界で強い発言力を有する関白藤原頼通に寄進せざるを得なくなったと考えられる。

平季基は、立荘時における島津荘の物資輸送路確保を巡り大隅守と激しい対立関係になった。季基は、大隅国府を焼き討ちすることにより、大隅守の大隅国内支配を麻痺させた。また季基は、大隅国衙と関係が深く焼き討ち事件後も大隅国衙付近に居住していたと考えられる藤原良孝の住居も焼き討ちすることにより、大隅国衙の在庁官人達との対立関係を生じたと考えられる。焼き討ち事件後季基は、大宰府との関係を解消し藤原摂関家との関係を構築し、藤原摂関家領荘園島津荘荘官として島津荘域に根を下ろしたと推測される⁽⁵⁵⁾。平季基が島津荘域に根を下ろしたことが、大隅国衙と島津荘域との対立関係を激化させることになったと想定される。大隅国衙と島津荘域との対立関係の存在が原因となり、第一章に示したような大隅国衙と大隅国内における島津荘域との対立関係が生じたと考えられる。

本章では、大隅国内における国衙と島津荘域との対立関係が生じた理由について考察した。その結果大隅国衙と島津荘域との対立関係が起きた原因は、島津荘立荘時における平季基の大隅国府焼き討ち事件とこの事件の結果による季基と大隅国衙在庁官人との対立関係であると考えられる。

おわりに

本稿では、大隅国内における大隅国衙・大隅国正八幡宮と島津荘との対立関係を示し、両者の対立関係が生じた理由について島津荘立荘時期に遡って考察した。その結果島津荘を成立させた平季基の大隅国府焼き討ち事件及びその影響が大隅国衙・大隅国正八幡宮と島津荘との対立関係を生じさせた原因であることを明らかにした。

今後は島津荘域が存在する九州南部三箇国について、各国衙と島津荘との関係、各国における島津荘の拡大過程、島津荘域における神社と荘園支配との関係等を考察していきたい。

- (1) 徳重浅吉「鎮西島津の庄，その成立・増大・住人並伝領」(『大谷学報』一〇一四，昭和四年，同一三年に同『日本文化史の研究』目黒書店に再録)，『鹿児島県史(一)』(鹿児島県，昭和一四年)，第三編国司時代，第八章島津庄の起源とその発達。竹内理三「薩摩の荘園—寄郡について—」(『史淵』七五，昭和三三年，平成一〇年に同『竹内理三著作集(七)荘園史研究』角川書店に再録)，工藤敬一「鎮西島津庄の寄郡について」(『京都大学読史会創立五十年記念国史論集』，昭和三四年，同四四年に同『九州庄園の研究』塙書房に再録)，同「遠隔地庄園の支配構造」(『史林』四五一一，昭和三七年，同四四年に同『九州庄園の研究』に再録)，郡山良光「寄郡制成立の社会的背景—島津荘薩摩方の場合—」(『鹿児島短期大学研究紀要』創刊号，昭和四三年)，海老澤衷「辺境荘園の成立過程とその存在形態—鎮西島津荘を中心として—」(『民衆史研究』一五，昭和五二年，平成一二年に同『荘園公領制と中世村落』校倉書房に再録)，奥野中彦「島津荘の成立と発展—寄郡制の再検討—」(『鹿児島県立短期大学紀要』三四，昭和五七年，同六三年に同『日本における荘園制形成過程の研究』三一書房に再録)，『都城市史 通史編 自然・原始・古代』(都城市，平成九年)，第三編古代の都城，第四章島津荘の成立，第二節島津荘の成立，等。
- (2) 在庁官人伴師高の系統は，島津荘域の弁済使職にも補任されている。山口圭正「国御家人」に関する一考察—薩摩国高城郡武光氏を中心に—(『九州史学』二七，二八，昭和三九年)を参照。
- (3) 大隅国建久図田帳の本文及び内容分析については，五味克夫「大隅国建久図田帳小考—諸本の校合と田数の計算について—」(『日本歴史』一四二，昭和三五年)を参照。
- (4) 平田信芳「(一)古代の大隅」(『歴史の道調査報告書(二)大口筋・加久藤筋・日向筋』鹿児島県教育委員会，平成六年)。
- (5) 五味克夫「大隅国建久図田帳小考—諸本の校合と田数の計算について—」，中世諸国一宮制研究会編『中世諸国一宮制の基礎的研究』(岩田書院，平成一二年)，諸国一宮の概要，大隅国一宮項。
- (6) 五味克夫「大隅国建久図田帳小考—諸本の校合と田数の計算について—」。
- (7) 田中健二「平安末・鎌倉期の大隅国衙領について」(『史淵』一一七，昭和五五年)。
- (8) 五味克夫「大隅国建久図田帳小考—諸本の校合と田数の計算について—」。
- (9) 本稿における年号・西暦は，米田雄介編『歴代天皇年号事典』(吉川弘文館，平成一五年)に拠る。
- (10) 工藤敬一「鎮西島津庄の寄郡について」。
- (11) 工藤敬一「鎮西島津庄の寄郡について」。
- (12) 都城市史編さん委員会編『都城市史 史料編 古代・中世』(都城市，平成一三年)，I 古代編，八 摂関家領島津荘の成立項，史料番号三七，島津庄々官等申状。
- (13) 島津本荘の場所については(1)の諸文献を参照，また本稿でも後述する。
- (14) 竹内理三監修・中野幡能編『宇佐神宮史 史料篇』三(宇佐神宮，昭和六一年)，一五六頁～一五八頁。
- (15) 中村明蔵「隼人国と国府の成立について」(『史元』一九，昭和五〇年，平成五年に同『新訂 隼人の研究』丸山学芸図書に再録)，同「薩摩国の成立について」(『鹿児島女子短期大学紀要』二一，昭和六一年，同年に同『熊襲・隼人の社会史研究』名著出版に再録)。永山修一「大宝二年の隼人の反乱と薩摩国の成立について」(『九州史学』九四，平成

- 元年, 同二一年に同『(同成社古代史選書六) 隼人と古代日本』同成社に改稿再録), 同「日向国の成立」(『宮崎県史通史編 古代二』宮崎県, 平成一〇年, 同二一年に同『(同成社古代史選書六) 隼人と古代日本』に改稿再録), 同「隼人の戦いと国郡制」(同『(同成社古代史選書六) 隼人と古代日本』)。
- (16) 中世諸国一宮制研究会編『中世諸国一宮制の基礎的研究』, 諸国一宮の概要, 薩摩国 I - 2 一宮項。
- (17) 島津荘寄郡は, 国衙と荘園領主と両方の支配下に属す半不輸地であるが, 荘園領主の支配権が強い特殊型半不輸地である。工藤敬一「鎮西島津庄の寄郡について」を参照。
- (18) 五味克夫「薩摩国建久図田帳雑考―田数の計算と万得名及び「本」職について―」(『日本歴史』一三七, 昭和三四年)。
- (19) 竹内理三監修・中野幡能編『宇佐神宮史 史料篇』四, (宇佐神宮, 昭和六二年), 四四五頁～四五二頁。
- (20) 五味克夫「薩摩国建久図田帳雑考―田数の計算と万得名及び「本」職について―」。
- (21) 竹内理三監修・中野幡能編『宇佐神宮史 史料篇』四, 四六八頁～四七九頁。
- (22) 拙稿「大隅国正八幡宮領の形成過程―大隅国の事例を中心に―」(『古代文化』六六一二, 平成二六年)。
- (23) 島津荘が立荘された場所が日向国諸県郡島津の地であることについては, 注(1)に掲げた諸文献に言及されている。
- (24) 永山修一『(同成社古代史選書六) 隼人と古代日本』, 第七章平安時代中期の南九州, 第二節島津荘の成立と大隅国府焼き討ち事件。
- (25) 都城市史編さん委員会編『都城市史 史料編 古代・中世』, 古代編, 八 摂関家領島津庄の成立項, 史料番号三八, 僧智恵申状案。注(1)諸文献。
- (26) 島津荘立荘の経緯や立荘者については, 注(1)に掲げた先行研究に既に指摘されている。
- (27) 野口実「鎮西における平氏系武士団の系譜的考察」(『鹿児島経大社会学部論集』一〇ノ一一, 平成三年, 同六年に同『中世東国武士団の研究』高科書店に再録), 『都城市史 通史編 自然・原始・古代』, 第三編古代の都城, 第四章島津荘の成立, 第三節平季基の系譜。
- (28) 竹内理三編『大宰府・太宰府天満宮史料』五(太宰府天満宮, 昭和四四年), 三八頁～四〇頁, 万寿三年(一〇二六年)三月廿三日付大宰府解。
- (29) 竹内理三編『大宰府・太宰府天満宮史料』五, 七二頁。
- (30) 平季基が大宰府府官であることは, 既に注(1)諸文献で言及されている。
- (31) 佐々木恵介「大宰府の管内支配変質に関する試論―主に財政的側面から―」(土田直鎮先生還暦記念会編『奈良平安時代史論集(下)』(古川弘文館, 昭和五九年)), 永山修一『(同成社古代史選書六) 隼人と古代日本』, 第七章平安時代中期の南九州, 第一節受領支配の進展。
- (32) 郡山良光「中世社会への起点―大隅守菅野重忠射殺事件の背景―」(『鹿児島中世史研究会会報』二九, 昭和四六年), 藤野秀子「大宰府府官大蔵氏の研究」(『九州史学』五三・五四合併号, 昭和四九年)。
- (33) 竹内理三「薩摩の荘園―寄郡について―」, 奥野中彦「島津荘の成立と発展―寄郡制の再検討―」。
- (34) 永山修一『「小右記」に見える大隅・薩摩からの進物記事の周辺」(『鹿児島中世史研究会報』五〇, 平成七年, 同二一年に同『(同成社古代史選書六) 隼人と古代日本』に改稿再録), 『都城市史 通史編 自然・原始・古代』, 第三編古代の都城, 第四章島津荘の成立, 第二節島津荘の成立, 小川弘和「摂関家領島津荘と〈辺境〉支配」(『熊本学園大学論集総合科学』一三一二, 平成一九年)。
- (35) 永山修一『「小右記」に見える大隅・薩摩からの進物記事の周辺」。
- (36) 原口泉他『(県史46) 鹿児島県の歴史』(山川出版社, 平成一二年), 三章律令国家の変質と中世社会の成立, 1 国内支配の矛盾と島津荘の成立, 薩隅地域と南島・宋との関係。
- (37) 渡邊誠「平安期の貿易決済をめぐる陸奥と大宰府」(『九州史学』一四〇, 平成一七年, 同二四年に同『平安時代貿易管理制度史の研究』思文閣出版に再録)。
- (38) 竹内理三「薩摩の荘園―寄郡について―」, 永山修一『「小右記」に見える大隅・薩摩からの進物記事の周辺」, 原口泉他『(県史46) 鹿児島県の歴史』, 三章律令国家の変質と中世社会の成立, 1 国内支配の矛盾と島津荘の成立, 薩隅地域と南島・宋との関係, 等。

- (39)『都城市史 通史編 自然・原始・古代』, 第三編古代の都城, 第四章島津荘の成立, 第二節島津荘の成立。
- (40)『『小右記』に見える大隅・薩摩からの進物記事の周辺』。
- (41)永山修一『『小右記』に見える大隅・薩摩からの進物記事の周辺』,『都城市史 通史編 自然・原始・古代』, 第三編古代の都城, 第四章島津荘の成立, 第二節島津荘の成立, 原口泉他『(県史46)鹿児島県の歴史』, 三章律令国家の変質と中世社会の成立, 1国内支配の矛盾と島津荘の成立, 小川弘和「摂関家領島津荘と(辺境)支配」。
- (42)都城市史編さん委員会編『都城市史 史料編 古代・中世』, I 古代編, 九 大隅国へ進出しようとした平季基項, 史料番号四〇,『小右記』長元二年八月二一日条。
- (43)永山修一『(同成社古代史選書六)隼人と古代日本』, 第七章平安時代中期の南九州, 第二節島津荘の成立と大隅国府焼き討ち事件。
- (44)永山修一『(同成社古代史選書六)隼人と古代日本』, 第七章平安時代中期の南九州, 第二節島津荘の成立と大隅国府焼き討ち事件。
- (45)永山修一『(同成社古代史選書六)隼人と古代日本』, 第七章平安時代中期の南九州, 第二節島津荘の成立と大隅国府焼き討ち事件。
- (46)竹内理三編『大宰府・太宰府天満宮史料』五(太宰府天満宮, 昭和四四年), 六六頁～六七頁, 長元二年(一〇二九)五月四日付太政官符。田中篤子「大宰帥・大宰大貳補任表」(『史論』二六・二七, 昭和四八年)。
- (47)竹内理三編『大宰府・太宰府天満宮史料』五, 六八頁～七〇頁。
- (48)永山修一『『小右記』に見える大隅・薩摩からの進物記事の周辺』。
- (49)徳重浅吉「鎮西島津の庄」。
- (50)原口泉他『(県史46)鹿児島県の歴史』, 三章律令国家の変質と中世社会の成立, 1国内支配の矛盾と島津荘の成立, 拙稿「大隅国正八幡宮領の形成過程—大隅国の事例を中心に—」。
- (51)永山修一『(同成社古代史選書六)隼人と古代日本』, 第七章平安時代中期の南九州, 第二節島津荘の成立と大隅国府焼き討ち事件。
- (52)平忠常の乱については, 野口実「忠常の乱の経過に関する一考察—追討の私戦的側面についての覚書—」(『青山史学』五, 昭和五三年, 同五七年に同『坂東武士団の成立と発展』弘生書林に再録)を参照。
- (53)野口実「忠常の乱の経過に関する一考察—追討の私戦的側面についての覚書—」。
- (54)都城市史編さん委員会編『都城市史 史料編 古代・中世』, 古代編, 九 大隅国へ進出しようとした平季基項, 史料番号四三,『小右記』長元四年正月一三日条。
- (55)前掲野口実「鎮西における平氏系武士団の系譜的考察」によれば, 薩摩平氏は平季基の子孫であると考えられている。また平姓救二院氏・安楽氏(『宮崎県史 通史編 中世』(宮崎県, 平成一〇年), 第一章武家社会成立期の日向国, 第一節鎌倉幕府と日向国, 三北条氏と日向国の諸領主)も平季基の子孫である可能性がある。即ち平季基の男系の子孫が島津荘域の領主として続いていると考えられる。